

---

**魔法少女リリカルなのはStrikerS 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年**

将

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年

### 【Nコード】

N1102V

### 【作者名】

将

### 【あらすじ】

これは、ある日テンプレのように死んでしまっただけで神様からチートをもらって転生という訳でもなく、ある日現実の世界から異世界にトリップした訳でもない。ただ、小さな少女をかばって、殺人犯に殺されて目が覚めれば赤ん坊だったというだけの話。（あらすじはあまり詳しく書けないので内容は本編で！）

## プロローグ（前書き）

一回短編で投稿させてもらって反応が良かったので連載したいと思っています。

こんな駄作&駄文ですが、よろしく願います。

それでは、魔法少女リリカルなのはStrikerS 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、はじまります・・・

## プロローグ

これは、ある日テンプレのように死んでしまつて神様からチートをもらつて転生という訳でもなく、ある日現実の世界から異世界にトリップした訳でもない。

ただ、小さな少女をかばつて、殺人犯に殺されて目が覚めれば赤ん坊だったというだけの話。

だが、その少年は前世の記憶がなかった。

いや、普通なら前世の記憶など覚えている者などいないのだ。だから、少年は普通に育つていっていくのだと誰もが想像出来ると思う。

そう、【普通】だったらだ。その少年は親から虐待を受けていた。

しかし、少年はまだ子供、大人の力には勝てない、少年はただ、黙つて虐待を受けるしかなかった。親の暴力を受けながら少年は思った、

『何故、僕がこんなにいたい思いをしなくちゃならないの?』と、

すると、親の暴力が止まった。

少年は目を開けてみた。

そこにはうずくまつて、うめき声をあげている両親がいた。そう、少年が受けていた痛みをその二人に【押し付けた】ように。

その出来事があつてから少年は親に捨てられ、友達には化け物と

言われ、虐めを受けていた。

少年はまた思った、

『こんな奴ら、消えちゃえばいいのに』と、

すると、その少年がいた世界は、少年を残して全ての人間が消えた。

そう、全てが【なかった】ように。

そして、少年は思い出した。自分は何者なのか、この能力は何なのかと、そして、少年はある町を見つけて、この世界がどんな世界なのかを……

少年 side

「そうか、そういう事だったのか。」

あの時、少女をかばって死んだのだとようやくわかった。

そして、この世界に転生というものをしてほしい。

なぜ、らしいと言うと、僕は死んでから今さっき意識がはつきりし  
たなかったのだ。

前世でよく見ていた二次元小説風で言うと、死んだら神様に会う、  
などといった物が多いが、僕はただこの世界に転生？したのだと思  
われるからだ。

僕は、自分がいた世界を抜け出した。

どうやって？つと言われれば、たまたま空間と空間の間を偶然に見  
つけたのだ。

その中に入って抜け出したのだ。なぜ、抜け出すの？つと聞かれれ

ば僕がいた世界は第22管理世界と言う。

この名前で大体わかると思うが、この世界は、「魔法少女リリカルなのは」の世界、つまり、アニメの世界だ。

あのまま、あの世界にいたら管理局が異変に気づき、調査にやってくるだろう。

その時に、僕だけいると知ったら間違いなく僕が疑われるだろう。だから、僕は抜け出した。

しばらく空間を移動してある世界について。

その世界は、このアニメの舞台である地球、海鳴市である。

この世界にいれば、中々管理局も手が出せないだろう。

僕は、このアニメは好きだ。本当は彼女達の力になりたいと思って  
いたけど、僕のこの過負荷ちからは闇だ。そして彼女達は光だ。  
プラスマイナス

光と闇は反対の位置にある。だから、僕は彼女達の力にはなれない。  
ならば、『僕』は彼女達の進む物語を支える【敵】となるう。

ん？自分の世界の人を消してなんとも思わないのかつて？

・・・だって、『僕は悪くない。だって、悪くないんだから。』あ  
あ、こんな事を思ってしまうなんて、僕はとことん過負荷マイナスだなあ。

そうだ、前の僕はもう死んだ、これからは「  
と  
と言つ各

前は捨てて、この過負荷のつよくを持っていた者の名前を貰おう。

これから、『僕』の名前は・・・

『球磨川 楔』

今、過負荷の少年が動き出す。

魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる  
過負荷の少年、始まります。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ちょっと最初と言う事で、短編を元にとってみました。

もしよければ、質問、感想、ご指摘の方、よろしくお願いします。  
それでは、皆様また次回まで〜ノシ

8月9日編集しました。



## 第1箱 無限の欲望とマイナスの少年の邂逅（前書き）

はい、第1箱目投稿です。

今回はタイトルでわかると思いますが、あの人との邂逅です！

え？なんでこの人が地球にいるかって？

・・・細かい事は気にしない（汗

それでは、魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、はじまります。

## 第1箱 無限の欲望とマイナスの少年の邂逅

楔 side

今、僕はここ私立聖祥大附属小学校に通っている。

何故、僕がこの学校に通っているかって？

・・・知りたいの？（黒笑み）

まあ、そんな感じでただ今絶賛小学生ライフを楽しんでます

けど、このクラス僕しかいないけどね。

《ピンポンパンポーン》

ん？なんだ、呼び出しか？

《球磨川君、今すぐ校長室まで来てください。繰り返します・・・》

》

おっと、僕におよび出だしがかかったみたいだね。

ちなみに、学校にはなのは達はいなかったよ。卒業してるみたい。

～移動中～

今校長室のドアの前だ。

ノックをしてっと。

コンコン

「入りたまえ。」

校長の声を聞いてドアを開ける。

開けたドアの向こうに、紫色の髪をした“アイツ”がいた。  
楔 side out

ジェイル・スカリエツィ side

私の名前はジェイル・スカリエツィ。

自分で言うのもなんだが、次元犯罪者だ。

今回、何故この世界に来たかというと、少し珍しい情報を聞いたからだよ。

何でも、ある小学校に生徒が一人だけのクラスがあると、登校義務も無く、授業もほぼ自習だと言う。

そんなクラスの生徒を一目見たくて、娘達に黙って来てしまったのだよ！

・・・帰ったら、怒られるだろうな。

コンコンッ

おや、来たね。

「入りたまえ。」

ガチャツ

「ツ！！？」

入ってきた子を見た瞬間、背筋が凍ったよ。

なぜなら、その子の周りが歪んで見えたからだよ。

「・・・君が、球磨川禊君だね？」

「『はい』 『僕が球磨川禊ですけど』 『貴方は校長先生じゃないと思っんですけど？』」

ツ！！？？

私は球磨川君の言葉を聞いてまた背筋が凍ったよ。

「・・・私の名前はジェルスカリエッティ。この校長先生にはすでに話は通してあるから、その校長先生には少し席をはずしてもらっているだけだよ。」

「『ふん』」

私は早速本題に入ろうとした。

「それでは、球磨川君にすこ〜」 『話を進める前に、ジェルさん』

「・・・なにかね？」

「『催促するようでも申し訳ありませんが』 『お茶をください』 『今すぐに』」

「『なにぶんここに来るまで随分道に迷っちゃったから』 『のど』 『渇いてしまいました』」

「・・・これは気の利かないことをで、失礼したね。すぐに淹れるから少々まってくれ。」

「『ありがとうございます』」

五分後・・・

「どござ。」

「『どござ』」

「『んっ』 『おいっ』」

「・・・しかし、この子の考えている事は読めないな。

一体、どんな事を考えているのか。

「・・・それで、球磨川君。君に頼みたい事がある。」

私はようやくやく本題を出した。

「『頼みたい事ですか』」

「そうです。単刀直入に言います。私に協力してくれませんか？」

そう、この子を見た瞬間、この子に私の計画を手伝ってもらおうと。

「『いいですよ。』」

「……即答だね。」

「『別に』面白そうだからですよ。』」

「……まだ内容も話していないのに？」

「『言わなくても』わかってますよ。』」

「ほづ。」

「『だから』手伝ってもいいと』『言ったんです』」

「……そうですか。」

そう言った彼は、相変わらずお茶をすすっている。

「『それに』『ちょうど良かったですし』『僕の夢を実現するため

に』」

「ん？なんだい、その夢って言うのは。」

「『いや、恥ずかしいですね。』」

「『僕の夢は』『管理局員を皆殺しする事です。』」

「なっ!?!?」

この子は、今なんと言った。

こんな10才ぐらいの子供が管理局の奴らを皆殺しにするだどどど。

「そ、そんな事ができるわけ……!」

「『できますよ』『僕は』『昔からそれだけ(……)を生き甲斐にしてきた男です』」

だが、そんな事……

「『僕が言っている事が大法螺や大袈裟ではないことは』『貴方も知っているのではないのですか?』『次元犯罪者さん』」

「……知っているのかい?私的事を」

「『ええ』『知っていますよ』『貴方の計画も』『全部ね』」

「……まさか!?

「……ここ最近、管理局では管理外世界に調査に行った局員が帰ってこないという。まさか、君がこれの犯人だと?」

「『ピンポン』『正解です』」

「……何故、そこまで管理局を恨んでいるんだい?何か理由でも

「？」

「『えー』 『理由？』 『理由ですかー？』 『弱りましたねえ』」

「『あ、そつだ！』 『局員に両親を殺されたつてどうです？』 『実の妹が局員に攫われたとかー』 『親友だと信じていた局員に裏切られたつていうのも萌えますよねー』 『んー？どれにするか迷うなあ』」

「……理由なんて、意味なんてないんですね。」

「……やはり、そんな事は出来ないでしょう。」

「『何故？』」

「君には、なんの力も無いのにそんな事が……！！」

ドンツ！！！！

いきなり、私の体に巨大な螺子が刺さった。

「『へーえ』 『じゃ』 『僕の過負荷』 『味わってみる？』」

「『知らない人だつたら攻撃されないと思つた？』 『黒幕ぶつてれば安全だと思つた？』 『僕が可愛い顔立ちだから』 『おしゃべりの最中なら死なないと思つた？』」

巨大な螺子を持って近づいてきて。

「『甘えよ。』」



私の顔を巨大な螺子が貫いた。

「はっ!?!」

「『……が』『その甘さ』『嫌いじゃあないぜ』」

!?!なぜここでいい台詞を  
いや!

それよりも今の一撃!幻覚でも!錯覚でもなく!確実に私の額を貫いたはずなのに!?

体に刺さっていた螺子もいつの間にか抜けていて  
しかも傷跡一つ残っていない!

服にさえ!

なんなんだ、このまやかし加減は!

あまりにもでたらめ(……)過ぎる!!

「『心配しないでくださいよ、ジエイルさん』『僕には』『こんなに弱い(……)力があるんですから。』」

「『とにかく』『僕の敵は管理局員だけです』『だから貴方には本当に感謝します』『こんな敵かんりきょくいんだらけの場所に僕を招待してくれた事を!』」

「……………」

私はこれまで、数々の違法研究所の実験体などを見てきた。しかし、この子はその実験体の比じゃない!!言葉でたとえるのなら、この子は……

「『ま、見ててください』『管理局員なんて連中』『僕が螺子伏せ

「てあげますから」

【負完全】！！

「『連絡は』 『僕の生徒資料でも見てください』」

「『それじゃ』 『失礼しました』」

そう言つて彼は出ていった。

クククツ！面白い。

これから彼がどんな事をしてくれるのか。  
楽しみです。

ジェイル・スカリエツィ side out

球磨川楔 side

「『まさか』 『スカリエツィから接触してくるなんてね』」

「『まあ、いいや』 『手間が省けた』 『さして』 『明日から頑張ら  
ないよね』」

僕は廊下をスキップしながら呟いた。

第1箱 無限の欲望とマイナスの少年の邂逅（後書き）

どうでしたか？球磨川の喋り方あってましたか？

よければ、ご感想、ご指摘お願いしますね。

それでは、『また次回も見てね』

8月9日編集しました。

## 第2箱 始まり(前書き)

はい、2箱目投稿)

今回はちよつと、短めです。  
申し訳ありません。orz

楔「『だつたら』『早く』『書きなよ』『」

おっしゃるとおりです・・・(泣

楔「『ま』『それはいいとして』『」  
それでは、

楔&将「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮  
面をかぶる過負荷の少年、始まります。』『」

## 第2箱 始まり

楔 side

「『へー』『これがレリックっていうんだ』『』」

僕は手に持っているものを見ながら言った。  
今、僕はモノレールに乗っている。

ただのモノレールじゃないよ？

そう！魔法少女リリカルなのはStrikersに出てくるあの暴走モノレールだ。

何故、僕がここにいるか言つと、

〈回想〉

「『ん？』『ドクターから連絡だ』『』」

ポケットに入っている携帯を取り出して電話に出る。

ちなみに、僕はスカリエッティの事をドクターと呼んでいる。

「『どうしたの？』『ドクターから連絡なんて』『珍しいっ』『』」

「はははっ！そう言わないでくれ。今日は頼みたい事があるね。」

「『頼みたい事？』『』」

「そう、少しおつかいに、ね？」

〈回想終了〉

「『で、今に至る訳』」

「『あれ?』 『僕』 『誰に話してるんだろ?』 『ま』 『いいやあ』」

「『ほんと』 『ドクターは人使いが荒いんだから』」

僕はやれやれ、とため息をついた。

「そこにいる人！時空管理局です。動かないでください!!」

「『ん?』」

僕が振り向くと、オレンジ頭のツインテール、つまり、ティアナラ  
ンスターがデバイスをこちらに構えていた。

・・・そうか、これファースト・アラートだったっけ?

「貴方は、何者ですか?」

「『うん?』 『僕が』 『何者だって?』」

「『ッ!!!?』」

「『そうだねー』 『教えてあげてもいいけど』 『やっぱり』 『教えてあげな〜い』」

「・・・その手に持っているものを渡してください。」

「『『これの事?』』」

僕はティアナランスターに手に持っている物を見せた。

「ッ！……それをこちらに渡してください。」

「『えー』『なんで?』『これは』『僕が手に入れたものだよ』」

「それは危険なものです!!」

「『残念』『わたさないよ』』『これはある人に渡さないといけな  
いから』」

「……なら、貴方を逮捕します。」

ティアナはそう言って、僕にデバイスを突きつけた。

「『いやん』『怖いよ』』『僕』『捕まっちゃうよ』』『でも』『  
残念』『僕にはこいつら)……(がいるからね』」

そう言った瞬間、楔の周りからガジェットが出てきた。

「クツ!!これは、ガジェット!?!」

まあ、これぐらいじゃ、死なないでしょ?

「『じゃ』『管理局員さん』『バイバイ』」

「ま、待ちなさいっ!!」

僕はガジェットに苦戦しているティアナにそう言って窓ガラスから  
脱出した。

まあ、顔はフードがぶつてたからわからないでしょ？  
そう思いながら、逃げていたら、

「その人！止まりなさい！！」

エンカウント率多くない？

僕がまた振り向くと、そこには魔王と死神、なのはとフェイトがいた。

うわあ、僕死ぬんじゃないの？

まあ、死ねないけど。

「時空管理局です。貴方が持っている物をこちらに渡してください。」

「

「『はあ』『さっきもモノレールで聞きましたよ』『そのセリフ』」

「君が持っている物、それは危険なものなの！だから、こっちに渡して？」

そう言っつて、優しく促してくるフェイト。

「『残念だけど』『これは』『ある人に渡さないといけないから』」

「『ッ！！？』『』」

「『じゃあね』『』」

そう言っつて僕は逃げた。

別に怖かったとかじゃないよ？ホントダヨ？ウソジャナイヨ？

後ろでなんか言っつてるけど、気にしない



これをドクターに渡さないとね。  
・・・なんか、デバイスが欲しくなってきた。  
ドクターに頼んでみようかな？  
楔 side out

なのは&フエイトside

「あの子、なんだか怖かったね・・・」

「うん、そうだね・・・」

二人は、球磨川楔という人物と遭遇した時は、なんでもない、ただ【普通】の子供だと思っていた。

しかし、楔が喋った瞬間、二人は同時の事を思った。  
『嫌悪感』

この文字が二人の心に芽生えた。

本能的に二人はこの人物は危険だ、と思っていた。

「今度会ったら、お話しなきゃね？」

「うん、なんでこんな事するのか、聞かなきゃ！」

二人は決意した。

## 第2箱 始まり（後書き）

はい、どうでしたか？今回は少し短めでした。

戦闘描写が中々書けそうに無かったので、今回は無しです。

申し訳ありません<（・・）>

それでは、ご感想、ご指摘お待ちしております。

また次回も『なかよくしてね？』

8月9日編集しました。

## 主人公設定（前書き）

はぐい、主人公設定をかきました。

## 主人公設定

将「はい！始まりました〜！球磨川楔の設定！！！！！！」

楔「『やけに』『ハイテンションだね』」

楔「『若干』『引くよ』」

将「はいその後ろにさがらな〜い！！」

楔「『……………』」

将「あの…………マジで引かないでください。」orz

楔「『じゃ』『さつさと』『やれ』」

将「……………はい」

名前 球磨川くまがわ 楔前世みせの名前は不明

年齢 (ファースト・アラート時) 14歳

身長 スバルよりちょっと低いぐらい

体重 48?

能力

ナス・『大嘘憑き』めだかボックスで『球磨川楔』が持っていた過負マイ

荷。

「ありとあらゆる事を全てをなかつた事」にする事が出来る。

・『不慮の事故』同じく、めだかボックスで『蝶ヶ崎 蛾々丸』ちようがさきがまる  
が持っていた過負荷。マイナス

「自分が受けたダメージを自分以外のものに押し付けるスキル。肉体的ダメージのみならず、トラウマやストレスなどの心理的なダメージも他人に押し付けられる」ことができる。

容姿 ぶつちやけ見た目球磨川のまんまwww

性格 球磨川のように『』を付けて話しているが、これはキャラである。

しかし、過負荷が発動してからは考え方が少し球磨川に似てきている。

ぶつちやけ転生者www

なのは達の敵となっている。しかし、これは彼がなのは達を殺すために敵になっているのではないらしい。

なにやら、上層部に因縁があるらしい。

楔「『これ』『すごく』『チートだよね?』『」

将「はいっ!!腕によりをかけてチートに……」

楔「『あ』『車だー』『」(超棒読み

将「なんで車ガハッ!!!!!!?」

楔「『よし』『悪は』『滅んだ』」

楔「『こんな』『駄作ですが』」

楔「『これからも』『読んでくれると』『うれしいな』」

楔「『それじゃ』『また』『次回』『ノシ』」

将「は、反省はして、いない……」(ガクッ)

## 主人公設定（後書き）

ということで、主人公設定でした。

また次回も『なかよくしてね？』ノシ

第3箱 『僕は悪くない』（前書き）

将「はい、今回はサブタイトルを見たらわかりますが、あの言葉が  
できますー！」

楔「『どうやって』『出すんだい？』」

将「ふっふふー、それは内容を見たら」「どうせ」「局員が餌食に  
なるんでしょ？」「……」

楔「『あら』『当たっちゃたの？』『ごめんごめん』」

将「……」orz

楔「『あら』『作者が』『へこんじゃった』」

楔「『じゃ』『僕がタイトルコール』『いくよ』」

楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面を  
かぶる過負荷の少年、始まるよ。』」

将「……なんで当てちゃうかな」「ブツブツ」

楔「『はい』『そこ』『いじけない』」



### 第3箱 『僕は悪くない』

機動六課 side

「どうしたの？はやてちゃん。急に呼び出して。」

「何かあったの？」

そう言った二人、前回襖と接触した人物、高町なのは、フェイト・T・ハラオウンだ。

「実はな、さつきゲンヤさんから連絡があつてな？」

そう言った女性、八神 はやては二人に言った。

「ゲンヤさんから？」

「そうなんよ、なんでも管理外世界に調査に行った局員が帰ってこないって訳なんよ。」

「原因は？」

「それが、通信も反応がないからわからんねん。」

「それで、私達が調査に行くんだね？」

「そうなんやけど、なんかいやな予感がするんよ。」

「大丈夫だよはやて！私達はそんなに簡単に負けないよ！」

「そっだよ！大丈夫だよ！」

「フェイトちゃん、なのはちゃん。」

はやては少し不安だった。

ここ最近、管理局員が管理外世界に調査に行くとその調査隊が帰ってこない事件が発生していた。

今回も、その事件と同じ内容だった、だからはやては心配だった。

「・・・そっやな、2人がそう簡単に負けるわけないもん！」

「そっだよ！」

「大丈夫だよ！」

二人はにっこりはやてに微笑みながら言う。

「まあ、今回はシグナム達にもついて行ってもらうから、大丈夫やる。」

はやてはそう言った。

「じゃ、はやてちゃん。早速行ってくるね。」

「わかった。ほな、行ってらっしゃい。」

そう言って、二人は部隊長室から出ていった。

誰もいなくなつた部隊長室ではやてが、

はやて「なんもなければいいんやけど・・・」

と、つぶやいていた。

機動六課 side out

楔 side

ふう、まだかな〜。

え？何を待っているのかつて？

そりゃ、管理局員さんだよ〜。

今回は、何人かな〜

おっ！来た来た

大体、10人くらいかな？

「『さあ』 楽しませてよね〜」

楔 side out

なのは side

今、ゲンヤさんの依頼でこの管理外世界に調査に来た局員達から連絡が無くなったという場所にきている。

「ここか？調査隊からの連絡が途切れた場所は。」

ピンク色の髪の女性、シグナムさんが言った。

「はい。ここで間違いありません。」

私はシグナムさんに答えた。

「でもよ、誰もいないぜ？」

そう言ったのは、赤毛で身長が皆よりちょっと？低い子、ヴィータちゃんだ。

「どこかにいるかもしれないから、探そう！」

「そうだな、テストロツサの言うとおり辺りを探せば」「うわあああ  
あ！」「ッ！！」

急に人の叫び声が聞こえた。

「なんだっ！？」

「とにかく、行ってみよう、調査隊の人が襲われているかもしれない！！」

私達は叫び声が聞こえたところに急いで向かった。

「これは・・・」

「ひどい・・・」

向かったその場所には、調査隊の人たちが巨大な螺子に貫かれていた。

一人は両腕に、一人は両足に、一人は胴体に螺子が刺さっていた。  
その中で、かろうじて生きている人がいた。

「大丈夫ですか!!」

私はその人に駆け寄った。

「何があった!」

「こ、子供が急に襲い掛かってきて・・・」

「子供だとっ!?!」

「私達も応戦したのですが、あっという間に全滅させられました。」

そんな、子供が犯人だなんて・・・

「その・・・子供は、魔法をゴフツ!!」

「もう喋るな!」

局長さんが無理に喋ろうとすると、口から血を吐いた。

「き、気をつけてください・・・まだ・・・あいつは・・・」

「

「っ!!!!」

「・・・・・・・・」

それから局長さんは動かなくなった。・・・クッ!

「『つわー』『しりゃひどい』」

「『……っ?!?!?!?』『……』」

声ができるほうに皆振り向いた。

そこには、中学生ぐらいの男の子が血だらけになってそこに立っていた。

両手にも血だらけの“螺子”の持っで。

「『これはひどい』『この人たちは』『きっと』『仲間割れをしたんだ』『そくに違くない』」

「『僕が来た頃には』『もう』『こうなっていたから』」

『僕は悪くない』

第3箱 『僕は悪くない』（後書き）

将「どうでしたか？」

将「今回は、オリジナルの話でした。」

将「次回はついに、バトルです！！」

楔「君に『書けるのかい』」

将「……………頑張ります」

楔「目を『そむけない』」

将「それでは、皆さんまた次回も」

楔「『あ』はぐらかした』『まあ』『いいや』」

将&amp;楔「次回もなかよくしてね？」

将「ご感想、ご指摘お待ちしております（><）」

8月9日編集しました。

## 第4箱 逃走（前書き）

将「今回は、バトルです！」

楔「『ちゃんとかけるの？』」

将「大丈夫！………たぶん」

楔「『たぶんかよ』」

将「いいじゃないか、それくらい見逃してくれよ」

楔「『僕に言うより見ている人に言えよ』」

将「……最近、楔口が悪くなってきたね」（泣）

楔「『別に』」

将「ひどいっ！！お母さん泣いちゃうっ！！」

楔「『それでは』魔法少女リリカルなのはStrikers 過  
負荷の仮面をかぶる過負荷の少年』始まるよ』」

将「無視ですね、わかります。」orz



## 第4箱 逃走

楔side

ヒュンツ!!

危なっ!!

あつ、どうも前回なのは達とまた会っちゃった球磨川楔です。いやいやいや、まさかすぐに攻撃してくるっ「ブンツ!!」おっとっ!  
もく、さっきから魔力弾やら剣で切りにくるしまつたく。

「『当たったら』『痛いんですよ?』」

「だまれ!! 貴様を管理局員殺害容疑で逮捕する!!」

なんだか、あのKY提督に似てきたんじゃない?

「『はあく』『これじゃ』『捕まる前に死んじやいますよ?』」

「ハツ!!」

・・・これ、全然話聞いてないな。  
まあ、僕がこんな事したからね。

「アクセルシューター!!」

あ、なんか撃ってきた。

「『よつと』」

僕はその攻撃に魔力で強化した螺子を投げる。

「嘘っ!？」

そしたら、あら不思議、ただの螺子がアクセルシュータとぶつかり、相殺した。

まあ、ただの螺子がまさか相殺するほどの力はないと思ったのかな？

「『さあ』『どうしたの?』『その程度?』」

「クッ!！」

「なんで、こんな事をするの!？」

「『こんな事?』」

わかっているけど聞いた。

「なんで、見ず知らずの人を殺したの!？」

ああ、やっぱり。

そんな事、決まっている。

「『なんとなくだよ』」

嘘だけだね。

これは、上層部に対しての嫌がらせみたいなものだから。

「そんな理由で殺したのっ!?!」

「テストロッサ!?!...もう、こいつに何を言っても無駄だ!」

そう言つて、剣を構えてくるシグナム。

ちっ!?!...めどくさいな。

僕も構えた瞬間、

「こつちにも、いるぞっ!?!」

ヴィータが僕の後ろにいた。

あ、これは避けねん「バキッ!?!」

僕は避けられずに吹っ飛んだ。

「よしっ!?!」

なのは「ヴィータちゃん!?!やりすぎだよ!?!」

ヴィータ「大丈夫だって、手加減はしたしな。」

「それでも」「あゝ」「痛いなゝ」「まったく」「...っ!?!?」

あゝ、頭がぐらぐらする。

なんか、なのは達が呆然としてる。

「お、お前、何で気絶するぐらいの力だったはず!?!」

「『だって』『そんなの当たったら痛いじゃん』『」

ヴィータ「確かに手ごたえはあつたぞ!」

「『そうだね』『でも』『僕はそのダメージをこの木に【押し付け  
た】からね』」

「はあ？押し付けた？意味わかんねえぞっ！！」

「『まあ』『もつとも』」

僕は油断しているヴィータの懐に一瞬で入り、

「『君達じゃ』『わからないと思うけどね』『」

腹に蹴りを入れた。

隙ありだ。

「ぐっ！！」

おゝ、結構飛んだね。

「貴様っ！！」

今度はシグナムか。

僕は螺子を取り出し応戦する。

「ハッ！！」

ガキンッ！！

おゝ、結構螺子でも応戦できるもんだね。

ん？シグナムが距離をとった？・・・まさか！？

「レヴァンティン！！」

《シユランゲフォルム》

「飛竜一閃！！」

うわゝ、これも避けられね〜ww

て言うか、こんな鞭みたいなのよけられる奴いるの？

「『ぐつ！』」

くっそゝ、ダメージは地面に押し付けたけど、衝撃は結構くるんだよ？

「『やっぱり』『今は』『分が悪いね』『逃げさせてもらおう』『』」

「この場から逃げれるとでも？」

ん？あちゃー、いつの間にか包囲されてる。でも、

「『逃げれるよ』『』」

僕は転送魔法を展開する。

「い、これは！？」

「転送！？」

「待てっ!!」

「『またね』『起動六課の皆さん』」

シュンッ!

楔 side out

なのは side

「『またね』『起動六課の皆さん』」

男の子はそう言って消えた。

「くそっ!逃げられたか。」

「ヴィータちゃん!!」

私はヴィータちゃんに駆け寄った。

・・・良かった、気絶してるだけだ。

けど、あの男の子はなんでこんなことを・・・  
なんとなくで人を殺すなんて、許せない。

「なのは、ヴィータは大丈夫?」

「うん、大丈夫、気絶してるだけだよ。」

「そっか、良かった。」

「六課に帰って、主はやてに報告をしなければな、あの子供のことも。」

今度は絶対に捕まえてみせる!!

#### 第4箱 逃走（後書き）

将「すいません、今回はめっちゃ、駄文でした。」

楔「『いつもの事でしょ？』」

将「今回はさらに駄文です。」（泣

将「戦闘描写を書いたのが今回が初めてでした。」

楔「『ふ〜ん』」

将「もし、よろしければアドバイスを教えてください。」ORZ

将「ご感想、ご指摘もお待ちしております。」

将「それでは、」

将&amp;wedge;楔「『次回もなかよくしてね？』」

8月9日編集しました。



アンケートです。

はいごーも！将<sup>しやう</sup>です。

今回は、皆様にアンケートをとりたいたなく、と思って書いたしだい  
でございます。

ちなみに、この作品についてではなく、まことにせんえつながら、  
また新しい作品を書きたいなく、と思ひましてその作品について  
のアンケートです。

それでは、内容を言いたいと思ひます。

主人公はテンプレどおり死んだ中学1年生です。

死んだ主人公は神様に会い、能力をもらいました。

そして、神様に勝手に恋姫の世界に（主人公はこのゲームを知らな  
い）送られると言う内容です。

そして、主人公が神様からもらった能力は、鋼の錬金術師に出てき  
た、最強の目とブラットレイの剣術です。

この作品を読んでみたいと思ひ方は一言お願ひします。

最初は短編で挑戦してみますので。

今回はそれだけです。

m これからも魔法少女リリカルなのはStrikerS 過負荷の仮  
面をかぶる過負荷の少年 をよろしくお願いします!!! m ( (

第5箱 転生者（前書き）

将「ども！将です！！！」

楔「『楔だよ』」

将「今回はなんと！！！！！」

楔「『なんと？』」

将「他の転生者をだします！！！！！」

楔「『・・・・・・・・』」

将「どつたの？」

楔「『だって』『皆からもらった』『感想に』『他の転生者は出さないで』『って言うのあったじゃん』」

将「ふっふふー、ご安心を！！今回の転生者は次回ぐらいで消えま  
す！！！！！」

楔「『どういふこと？』」

将「だって、楔にフルボッコにされますからWWWWW」

楔「『君って中々鬼畜だね』」

将「・・・・・・・・・・」（、）

楔「『はっきり言って』『キモイからやめて』」

将「ひどいつー!!」orz

楔「『その転生者の性格は?』」

将「スルーですね、わかります。」

将「性格は最低の生ゴミやろつです。」

将「それでは、」

将& amp ;楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過  
負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まります。』」

将「恐れと共に跪けつー!!」

楔「『おい』」( ; )

## 第5箱 転生者

ジエイルside

久しぶりに登場だ。

ん？今私は誰に言ったんだ？

「ドクター……」

やめろ！！そんな冷たい目で私を見るな！

「ゴホンッ！」

わざと咳き込んで場を整えて。

「ふむ、楔君は良くやってきているね。」

前回のモノレールでは、レリックを見事に持ってきてくれたからね。

「楔君は今どこだい？」

「確か、ちょっと出かけてくると言っていました。」

「何処に行くか聞いているかい？」

「いえ、聞いていません。」

ふむ……。

《ピピピピピッ！》

「おや？楔君からだね。」

ピッ

「どうしたんだい？」

「『ドクターにちょっと聞きたいことがあってね』」

まだ楔君のこの話し方はなれないな。

「なんだい？」

「『最近』『最高評議会と』『手を組んだ奴』『わかる？』」

最高評議会と手を組んだ奴？

「確かに知っているけど？」

『そいつの』『詳細』『わかる？』『』

「ああ」

なんだか様子が変だ。

いや、様子が変わるのはいつもだが、今回は特に変だ。

「『じゃ』『教えて』『』」

なんだか、怒っている風に見える。

「……わかった。」

そして、私はデータを楔君に送った。

「『んっ』『ありがとう』」

「一体、何をするんだい？」

「『……』『別に』」

「……そうかい。」

プツッ！

楔君、君でもコイツには勝てない。

コイツは、まさしく化け物だよ。

私らしくないが、君の無事を祈っているよ。

「ドクター……」

ジエイルside out

楔side

どうも最近、最高評議会と手を組んだ奴がいる。

それは、僕と言つイレギュラーがいるから、起こった事だと思つていた。

しかし、ドクターからもらったデータを見て確信した。

コイツは転生者だ。

何故分かったかと言うと、あまりにもでたらめすぎるからだ。

転生者の名前は、阿久津<sup>あかつ</sup> 彰人<sup>あきて</sup>。

容姿は、銀髪碧眼のイケメンらしい。

魔導師ランクなどが全てEX、つまり測定不能である。

レアスキルも有り。

……チートすぎる。

なんだこれ？ふざけるのも大概にしろよ。

「『はあ〜』」

Orzの状態である。

？《元気を出してください、マスター》

楔「『でもさあ〜』アリスも『チートだと』『思わないの？』

『じね』」



《確かにそうですが・・・》

僕のデバイスのアリス、ドクターに作ってもらったインテリジェントデバイスだ。

待機状態はピースになっている。

ちなみに、アリスは主に補助のデバイスだから、攻撃には向いていない。

《マスター、そろそろ目的地に到着します。》

「『ん』『わかった』」

僕は、今まさにその転生者のいるところに向かって飛んでいる。

《っ！！！！マスター！！！！》

「『』どうしたの？』」

《前方から魔力反応です！！》

アリスが言ったとおり、前から無数の剣や槍などが飛んできた。

「『クッ！！！！』」

この攻撃、十中八九転生者の攻撃だな。

《マスター、どうします？》

「『どうもどうも』 『空がだめなら』 『歩くしか無いじゃん』」

《そうではなく、今の攻撃を見て、勝てると思うんですか!?!》

「『レツッゴ』」

アリス《マスター!?! 聞いているんですか!?!》

無視、無視

〜移動中〜

「へえ〜、あの攻撃を見ても逃げなかつたんだ〜」

《（な、なんて魔力の大きさ!?!）》

うわ〜、情報どうり銀髪碧眼のイケメンだ〜。

「それで?なんで最強無敵のオリ主の俺様の事を探していたんだよ。」

.....ぶっ。

こいつ、自分でオリ主とか言っている。

「『いやいやいや』特にこれと言って『理由なんて無いですよ。』」

「ああん？」

「『同じ転生者がどんな奴か』見たかっただけですよ。』」

「てめえ、転生者か？」

あゝあゝ、魔力駄々漏れじゃん。

絶対、制御できてないなこれ。

「『そうだけど?』」

「だったら、てめえを殺す!!」

「『……』『理由は?』」

「この世界は俺様の物だ!!これから、あの脳みそ共と手を組んで、なのは達を捕まえて俺様好みに調教してやるんだよっ!!ぎゃははははははっ!!!!!」

「……………ゴミが。」

「だまれ、ゴミが。」

ぴたっ、阿久津の笑いが止まる。

「なんて言った?てめえ。」

《マスター？……》

「聞こえなかったのか？黙れと言ったんだ、ゴミがつ！！！」

久しぶりに切れた。

こいつ、殺すだけじゃ足りない、絶望以上の絶望を叩き込んで殺してやるよ……。

## 第5箱 転生者（後書き）

将「はい、ゴミ転生者の登場でした」

将「次回、転生者フルボツコOK？」

楔「『括弧が』『外れたね』」

将「まあね」

将「ご感想、ご指摘お待ちしております。」

将「それでは、」

将& amp; 楔「『次回もなかよくしてね？』」

8月9日編集しました。

## 第6箱 理由(前書き)

将「お気に入り100件突破————!!!————!!!」

楔「『こんな』『駄作を』『ありがとうございます。』」

将「あひゃあひゃあひゃあひゃっ!!!——!!!」

楔「『壊れるほど』『うれしいみたいです』」

将「うひよひよひよひよひよっ!!!——!!!」

楔「『このままだと』『進まないの』『僕が』『仕切らせてもら

うよ』」

楔「『今回は』『転生者を』『フルボッコの回だよ』」

楔「『そして』『今回で』『僕の本音が……?』」

楔「『それでは』」

楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まるよ。』」

将「ぶわ————ハッハッハッハッは————!!!——!!!」

楔「『壊れすぎ』(…………)」

## 第6箱 理由

阿久津 side

俺様の名前は阿久津<sup>あくつ</sup> 彰人<sup>あきと</sup>だ。

神様とか言う奴に手違いで殺されたから、チート能力をもらって「リリカルなのは」の世界に転生した。

ちなみに、能力は王の財宝（中身は原点ではなく、投影によるもの）とアーチャーの投影をレアスキルにしたものだ。

さすがに無限の剣製まではもらえなかったが、十分だ。

このチート能力でなのは達を俺様の虜にしてハーレムを作る予定だった。

だが、この目の前にいる男、こいつが言うにはコイツも転生者だという。

俺の計画に邪魔だな。

「だったら、てめえを殺す!!!」

「『……………』理由は?」

理由?そんなもん、決まってる!

「この世界は俺様の物だ!!!これから、あの脳みそ共と手を組んで、





《マスターではアイツには勝てません、マスターも分かっているはずです!!》

ああ、アリスには僕の過負荷オウゴカク言っつてなかつたっけ？

まあ、いいや。

まずは、

「『目の前の』『ユミを』『消さなきゃね』」

「死ね」

アイツの背後から剣や槍が出てきた。

「『王ゲイトオブパピロンの財宝か』」

本当にチートだねえ。

けど、中身は原点じゃなさそうだけど。

そんな事を考えていたら奴の宝具が射出された。

「『アリス』『プロテクション』」

《プロテクション》

ある程度の宝具は防いだ。しかし、

「そんな薄い盾で防げるとでも思ってたのかっ！……！」  
バリッッ！！

今はプロテクションのつぶれる音だ。

あ、やべ。

《マスター！……！》

次々に僕の体に宝具が刺さっていく。

「ひゃはははははは……！」

「『かはっ』」

「そのまま串刺しにされちまいな……！」

ドスドスドスツッ……！！

「弾けな……！！壊れた幻想（ブロークンファンタズム）……！！」  
「！」

ニヤッ、その時僕の顔は笑っていただろう。

楔side out

阿久津side

「ぎゃはははは……！」

死んだなあいつ。

この攻撃を喰らって死んでない訳がない。

今、土煙で見えないが、確実に手ごたえはあった。

「これで、俺様の計画の邪魔をする奴は消えたな。」

これで、俺様のハーレムが完成したも当然。

さあ、奴の死体でも拝みに行くかな。

最も、死体が残っていたらの話だがな。

土煙も晴れてきた、さて、奴の死体h

ドストスツ!!!

「ぎゃあああああ!!!」

な、なんで螺子が飛んできたんだ!?

「『あはっ』『隙あり』」

「なっ!!!?」

なんでアイツ生きてんだよっ!?

「お前、何で生きてんだよっ!?!?!?」

確かに、コイツは俺の宝具に串刺しになっただはず!?

「『君』ごときに『殺されるとでも』『思ったの?』」

ドストスツ!!

「ぎゃあああああああ!?!?!」

あ、足がっ!!

「『と言っても』『確かに』『僕は』『一度死んだよ』」

なっ!?

「な、なら、なんで生きてんだよ!?!」

「『僕』の能力だよ』」

「レアスキルか!?!」

こいつ、レアスキルまで持っていていやがったのか!?!

「『まあ』『そんなものかな?』」

「だが、生き返れる能力なんて聞いた事ない!?!」

「『違うよ』『生き返ったんじゃない』」

「な、なんだと!?!」

「『僕が』 『死んだ事を』 『【なかったこと】にただけだよ』」

「そ、そんなバカな!!!」

なんだ、そのでたらめな能力!!!

こんな奴に勝てるわけない!!!!!!

「ふざけんなあああああ!!!!!!!!!!!!」

魔力を全開にして、奴の目をくらまして逃げようとしたが、

一瞬で、俺の魔力が消えた。

「.....は？」

呆然とするしかなかった。

「『ふふっ』 『面白いでしょ？』 『君の魔力とレアスキルを【なかつたこと】にしたんだ。』」

「そ、そんなっ!?!」

バカなっ!!!俺は最強オリ主だぞっ!!!

「『じゃ』 『そろそろ』 『終わりにしよっか』」

そう言って奴は手に螺子を持って近づいてくる。

「ま、待てよっ！！てめえスカリエツティ側だろっ！？何で俺の邪魔をするんだよ！！」

「『確かに』『僕は』『彼女達の敵だ』『でも』」

僕は『括弧』を外して言った。

「僕は彼女達の進む未来の支えになると決めたんだ。」

「く、来るなっ！！！」

「だから、彼女達の進む未来を穢すという奴は。」

「や、やめっ！！」

「螺子伏せるっ！！！！！」

そして、俺の意識が途絶えた。

阿久津 side out

第6箱 理由（後書き）

楔「『いかがでしたか？』」

将「フルボッコといえるかな、これ？」

楔「『さあ？』 『読者さまに聞いたら？』」

将「それはそれで怖い」

楔「『へたれ』」

将「何とでも言え」（泣

将「ご感想、ご指摘お待ちしております。」

楔「『それでは』」

将& amp; 楔「『次回も な か よ く し て ね ？ 』」

8月9日編集しました。





## 第7箱 帰還

楔 side

「……………」

僕は今、顔面に螺子が刺さって動かなくなった阿久津を見下ろしている。

《マスター…………》

おっと、アリスに心配をかけさせてしまう。

「んっ」 『大丈夫だよ』 『さて』 『帰ろっか?』

《…………はい。》

疲れたから、さっさとラボに帰って寝たい。

《(マスターはさっき確実に攻撃を受けた。なのに無傷なんて、ありえない!!)》

「はあ〜」 『疲れたね』 『アリス』

《…………》

「『どうしたの?』」

《マスター、さっきマスターは確実に相手の攻撃を受けたのに、何故無傷なのですか？》

ああ、アレの事が……

「『まあ』 『レアスキルみたいなものだよ』」

実際はそんな生易しいものじゃないけどね。

この過負荷ちからは……

《しかし、そのような効果のレアスキルは聞いたことがありません  
！》

「『だろうね』 『この力は』 『強大だからね』 『それに』 『この力は』 『僕しか使えない』」

《マスターだけ、ですか？》

「『そうだよ』 『この力の効果は』 『現実すべてを虚構なかつたことにする』 『それが』 『僕のマイナスの一つ』 『大嘘憑き（オールフィクション）だよ』」

《なかつたことにする力……》

《……マイナスとはなんですか？》

「『人間として』 『駄目で最低な人間の事さ』」

そう、駄目で最低な奴だよ……僕は。

《……………》

「『さて』『転移』『よろしくね』」

《……………了解です》

そして、僕とアリスはラボに転移した。

楔 side out

アリス side

マスターの力について教えてもらいましたが、正直に言うとそんなでたらめな力あるはずがないと思いました。

しかし、実際にその力が使われているのだから、信じるしかない。

私は転移中に考えを整理していた。

その説明の中で、最後に質問した内容、マイナスについてのマスターの解答が気になっていた。

（人間として、駄目で最低な奴のことさ。）

そう言ったマスターの顔がいつも作っている表情と微かに、悲しみがでていた。

マスターの過去に、何があったのか。

私はラボにつくまでずっと考えていた。

アリス side out

楔 side

《到着しました》

「『ありがとう』『さて』『ドクターの所に』『報告』『しなくちやね』」

ラボに着いて、すぐにドクターの所に向かった。

「『ドクター』『今戻ったよ』」

「ああ、お帰り楔君。」

ドクターはこちらに視線を向けてそう言った。

「『あいつ』『計画に邪魔そうだったから』『消してきたよ』」

そう僕が言ったら、ドクターは一瞬、驚いた顔をした。

そして、次には笑っていた。

「クツハハハハハッ!!!」

「『?』『?』」

「いや、すまない。あまりにも唐突だったからね。ククツ。」

「『そうっ?』」

「で?どんな手をつかったんだい?」

ドクターは目をキラキラさせながら聞いてくる。

「『別に』 『ただアイツの魔力とレアスキルを』 『なかったことにして』 『螺子伏せただけだよ』」

「……………は?」

ん?どうしたんだろ?

「すまない、もう一度言ってくれ。」

「『だから』 『魔力とレアスキルを』 『なかったことにして』 『螺子伏せた』」

「……………それは、君の力かい?」

「『うん』 『そうだよ』」

「どんな力なんだい?」

「『えーっと……………』」

（説明中）

いや、別に書くのがめんどくさいからじゃないんだからねっ!?!?

「……………なるほど。」

「『あれ？』 『あんまり』 『驚かないんだね』 『ドクターは』」

大抵の人は驚くのに。

「いや、驚いているよ、そんな力が君にあつたなんてね。」

「『あんまり』 『驚いてる風には』 『見えないけど』」

僕はドクターをジト目でみた。

「ハツハツハツハツ！君とどれくらいの付き合いってるとおもっているんだい。」

「『まだ』 『そんなに経ってないからね？』」

「む？そうだったかい？アツハツハツハツハツ！」

まったく。

「それに、まだあるんだろう？君の力は。」

「『さあ？』 『あるかもしれないし』 『ないかもしれない』 『なんせ』 『僕は』 『嘘つきだからね』」

「ククッ、そうだったね。」

「『さて』 『僕は部屋に戻るよ』 『詳しい事は』 『アリスに聞いてね』 『んじゃね〜』」

そう言っ僕はアリスをドクターに渡して部屋を出た。

後ろからアリスが「ちよっ！！めんどくさいからって丸投げしないでくださいよ！！」なんて聞こえない、聞こえない。

部屋を出て、自分の部屋に向かう途中、右目を眼帯で覆い隠した、銀髪の小柄な少女。ドクターが生み出した戦闘機人の？5のチンクと会った。

「『やあ』『チンク』『久しぶりだね』」

「貴様か・・・何のようだ。」

あちら、どうもナンバーズの皆は僕のが嫌いみたい。

その証拠に、チンクからすこし殺気が出ているからね。

「『別に』『ただ自分の部屋に行く途中だよ』」

「そうか、ならばさっさと行け。」

そう言って、チンクは行ってしまった。

性格的に嫌われるって分かってたけど、ちょっと傷つくな<sup>キャラ</sup>。

ま、そんな風にしてるんだけどね。

僕はトテトテと自分の部屋に向かった。

楔 side out





## 第7箱 帰還（後書き）

将「今回は、あまり進めませんでした。」

将「少し、日常編を書いていきたいと思っています。」

将「今回、チンクを出してみました。セリフ少ない・・・」ORZ

将「今は、楔はナンバーズの皆に嫌われていますが、その内仲良くさせるつもりです。」

将「それでは」

将「次回もなかよくしてね？」

将「ご感想、ご指摘お待ちしております。」ノシ

将「ところで、楔は？」

道具を持ってくるそうです。お仕置き用の。

将「イーーーーーヤーーーーー！  
！……！」

短編書いてみました(DOG DAYS)(前書き)

将「短編書いてみました。」

短編書いてみました(DOG DAYS)

ある日、ある世界で一人の弓兵が死んだ。

ある日、ある世界に一つの流れ星が落ちた。

その流星が落ちた場所には、死んだはずの弓兵が倒れていた。

その弓兵が目を覚ますと、弓兵は驚いた。

それは、自分が生きている事と、この世界が自分のいた世界ではない事に。

普通ならば、生きていたら元の世界に戻りたいと思うが、弓兵は違う。

自分は帰れない、否、帰る場所がない。

自分は追われる身なのだから。

ならば、この世界で生きていく。

弓兵は決意する。

そして、弓兵はつぶやく。

自分の人生を元に作った詩を、

I am the bone of my sword .  
体は剣で出来ている。

Steel is my body , and fire is  
my blood .

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand  
d blades .

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death .

ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life .

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to creat  
e many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never ho  
ld anything .

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray , unlimited blad  
e works .

その体は、きつと剣で出来ていた。

弓兵は歩き出す。

DOG DAYS ～千年賢者の日記～

短編書いてみました(DOG DAYS)(後書き)

将「良ければ、ご感想ください!!」

## 第8箱 日常 パート1（前書き）

将「今回は日常編です。」

楔「『へー』『僕の』『普段』『なにしているのか』『わかるんだ』」

将「おう！……いや、多分……きっと……メイビー？」

楔「『不安だらけだよ』」

将「そ、それじゃあ、」

将& amp ;楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過  
負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まるよ。』」

楔「『逃げたね』」

将「ナ、ナンノコトヤラ？」

## 第8箱 日常 パート1

楔 side

只今、何もすることが無く自分の部屋にある布団に入ってダラダラしている楔です。

いやー、あの転生者殺したら、なんかすること無くなってね。

最高評議会もなんか転生者あいつが死んだからもう、慌てまくり（笑）

ざまあ、くそ脳みそ共WWW

ほんで、最近機動六課が活躍してるみたい。

うんうん、このまま原作どつりに行けばいいんだけど。

でも、ドクターは助ける。

本当は、ドクターは悪くないんだ。

確かに、非道な実験はしていたけど、それもこれもあの脳みそ共のせいだ。

なるべく、ドクターの罪を軽くさせる方法を考えなければ。

僕は布団のでどうするか考えていた。



「まあ、まだ考えなくてもいいか。」

そう結論した僕は、暇なので布団から出て、着替えて、自室を出た。今の僕の格好は黒の学ラン、マンガの球磨川と同じ服装だ。

なぜかこの格好がしっくりくる。なぜだ？

そして、僕が向かった場所は、

「『ドクター』『暇だから』『遊びに来たよ』」

そう、ドクターの部屋だ。

「ん？そうかい、特に何も無いがゆっくりしていつてくれ。」

ドクターは机の上の画面から少し視線を僕に向けて、すぐに画面に戻った。

僕は近くにあった椅子に腰掛けて、どこからともなく少年ジャOPPを取り出して、読み出す。

ジャOPPを読み出して、10分ほどしたところ、ドクターがこっちに視線を向けた。

「そういえば、アリスを返していなかったね。」

そう言って、ドクターは机の上にあったアリスを渡してきた。

「『忘れてたよ』」

《ひどいですよ！―あの後、すごく疲れたんですからね！―》

「『ごめんごめん』」

昨日はすぐ寝ちゃったからね。

《まったく。》

「『そういえば』『ドクター』」

「なんだい？」

「『さつきから』『ドクターは』『なにをしてるの？』『』」

「ああ、娘達の調整だよ。」

「『』へー』『』」

あまり興味が無いのですぐに本を読む。

「そっだ、調整ついでに楔君、娘達の相手になってくれないかい？」

「『』………は？』『』」

読んでいた漫画を落としてしまった。

「いや、楔君なら娘達の相手ができると思ってね。」

え〜〜。

《いいじゃないですか、マスターは最近コロコロしすぎです。》  
アリスまで……

「『まあ』『別に』『いいけど』」

「ありがとう。」

はあ、めどくさいな。

ナンバーズの調整が終わるまで、僕は再び、漫画を読み始めた。

しかし、何故かジャップにめだかボックスが載っていない。

僕が入るからか？まあ、いいけど、そっちの方がこっちの手がばれなくてすむ。

ん？そろそろ、調整が終わりそうだね。

「『じゃ』『ドクター』『先に練習場？に行っとくからね？』」

「ああ、先に行っておいてくれ。」

「『ん』『了解』」

そして、僕は部屋を出た。

（楔移動中）

はい、着いた！！

「『さて』『準備運動でも』『しておこうかな』」

《そうですね。》

じゃ、まずは屈伸から。

楔side out

ノーヴェside

なんか、調整が終わったらドクターが訓練場に行けと言ったので、今私達は訓練場に向かっている。

「でも、なんで急にドクター訓練場に行けなんて言ってきたんだろ？」

私が疑問に思ってたつばやいてみた。

「わからん。だが、訓練場ということは模擬戦でもするのだろうか。」

私のつばやきに答えてのはトーレ姉だった。

「じゃ、誰と誰がするんだろうね。」

その話に乗ってきたのが、セインだ。

「ノーヴェとウェンディじゃないか？」

「え〜！いやッス〜！！ノーヴェってば、手加減してくれないん  
つすよ〜。」

今話したのが、上からチンク姉とウエンディだ。

そんな話をしていたら、訓練場についていた。

そして、中に入った。

「『あ〜』 『やっと来た』 『待ちくたびれたよ』」

そこには、最近ドクターが連れてきた気味の悪いあいつが、感情の  
こもっていない笑顔でそこにた。

第8箱 日常 パート1（後書き）

将「はい、今回は短かったですね」

楔「もしかしくなくても」 『次回は・・・』

将「はい！戦闘です！！」

楔「『まあ』 『がんばりなよ』」

将「なにそのもう諦めている感じの応援は！！！！」

楔「『だって』 『ねえ？』」

将「クツ！！反論できねえのが悔しいぜ！！」

楔「『（ー）（ー）ハア』」

将「こらそこ！！顔文字で表現しない！！」

楔「『それでは』」

将「あつ、無視ですね、分かります」 orz

楔「『ご感想』 『ご指摘』 『質問など』 『お待ちしております』」

楔「『次回も なかよくしてね？』」

将「無視って、さびしいね。」or z

z  
w  
w

第9箱 日常 パート2（前書き）

将「はいはい、更新ですよ」

楔「『夏休みだから』『時間あるもんね』」

将「しかし！！夏休みが半分過ぎましたが、わたくし」

将「宿題を一つもしておりません！！！！」

楔「『消えちゃえば？』」

将「ぐはっっ！！！！！！！！！！」

楔「『それでは』」

楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まるよ』」

将「宿題……どうしよう（泣）



## 第9箱 日常 パート2

チンク side

「ハア、ハア、ハア、ハア。」

私は、いや私達は今ボロボロになって倒れているあの男と模擬戦をした。

まさか、ここまで苦戦するとは、何なのだ、この男は!?

「チンク姉、アイツ死んだの?」

地面に倒れこんでいるノーヴェが問いかけてくる。

「わからないが、重傷は間違いない。」

コイツと戦ったのは、私、ノーヴェ、セイン、トーレ、ウエンディの五人だ。

コイツは私達五人がかりでやっと倒せた。

「っ、疲れたっす。」

ウエンディが膝から崩れ落ちるように倒れた。

「さすがに、私も疲れた。」

トーレもボロボロだ。

「しかし、ドクターは何故、コイツと模擬戦などさせたのだろう?」  
私が考えていると、

「やあやあ、見事にボロボロにされたね、楔君?」

ドクターが、もう死んでいるかもしれないアイツに語りかけた。

「ドクター、残念ながらそいつはs」  
「まったくだよ」  
「ッ!?!?!」  
「?」

背後からアイツの声が聞こえ、すぐに後ろを向く。

「ば、馬鹿なっ!?!」

なぜ、アイツは無傷で立っている!?!

アイツは確かに、私達が重傷させるぐらいの攻撃を受けたはず!!

なのに、なぜアイツは無傷なんだ!?!

他の姉妹達も驚いている。

「貴様、なぜ生きている!?!」

トーレが武器を構えて言った。

「『で?』『ドクター』『調整は完璧なの?』『」

「ああ、楔君のおかげで絶好調だよ!!」

「……調整？」

「あの、ドクター、どういふことですか？」

「ん？ああ、これはお前達の調整のために、楔君に手伝ってもらったんだよ。」

「……は？」「」「」

これは、ドクターが指示していたのか。

「『皆』『容赦なく攻撃してきたからね』『結構きつかったんだよ』『手加減するのよ』」

何っ!?!あれで手加減だと!?!

「ハッ!そんなのハツタリに決まってるじゃねーか!」

「『だつたら』『攻撃してみなよ』『その代わり』『こつちも』『攻撃するよ?』」

ゾクッ!!!

ッ!?!???なんだ、アイツの周りが歪んでいる!?!

「おもしれー!?!やれるもんならやってみるよっ!?!」

駄目だ！！今、奴には近づくな！！

ドストスツ！！

次の瞬間には、ノーヴェの両足に巨大な螺子が突き刺さった。

「だから言っただろう？」 『次は』 『僕も攻撃するって』 「

ノーヴェはそのまま地面に倒れた。

「「「「ノーヴェ！！！！！！」」」」

私達はすぐにノーヴェの所に向かった。

チンク side out

楔 side

「ククツ、中々えげつない事をするんだね？」

「『別に殺してないんだから』 『いいでしょ？』 「

今、ノーヴェが突っ込んできたので、ノーヴェの両足に螺子を突き刺してやった。

ちなみに、怪我はないよ。変わりに足にある疲れ？見たいなのを「  
なかったこと」にした。

刺されたショックで気絶したみたいだけど。

「貴様アアアア！！！！！！」

すると、トーレが攻撃してきた。

僕はそれをよけることはせずに、受けた。

ローキックをわき腹にくらって、訓練場の壁に吹っ飛んだ。

ダメージは壁に「押し付けた」ので、怪我なし。

「落ち着きなさい、トーレ。」

ドクターが、トーレをなだめた。

「しかし、ドクター、アイツはノーヴェに……」

失礼だな、正当防衛だろ。

「けれど、ノーヴェは実際怪我はしていない。」

「そんなはずは……っ!?!?」

「怪我が、ない!?!?」

当たり前でしょ。

「そんな、確かに螺子が刺さっていたはず。」

「これでわかっただろう？ 楔君はむやみに人を傷つける事はしない

よ。」

ドクター、僕はそんな良い人じゃ<sup>プラス</sup>ないよ。

「『ドクター』『用事も済んだし』『もう部屋に戻ってもいい?』」

「ああ、手伝ってくれてありがとう。」

「『んじゃ』『ばい~』」

そう言つて、僕は訓練場を出た。

はあく、また布団に入って寝よう。

楔 side out

ジェル side

「ドクター、奴は何者なんですか?」

ノーヴェを部屋に運んで、寝かせた時にチンクが尋ねてきた。

「ふむ、楔君が何者、か。」

「正直に言つと、私、いや私達は奴が嫌いです。」

ふむ……

「奴は、いつも気味の悪い喋り方で、感情のこもっていない顔で、本当に人間なのかもわからない奴です。」

「……前に、楔君は自分のことをマイナスと言っていた。」

「マイナス？」

「そう、楔君が言うには人間として駄目で、最低で、壊れている奴のことらしい。」

「……………」

「……過去に、とある管理世界からありとあらゆる生物が消えた事件を覚えているかい？」

「はい、確か、第22管理世界ですよね？」

「ああ、……………実は楔君が言っていたのだが、彼がその事件を起こした犯人らしい。」

「……………えっ!!!!!!」「」「」

「詳しい事は聞いていないが、彼の能力、いや、<sup>マイナス</sup>過負荷といった方がいいか。その過負荷で生き物を消したらしい。」

「そんなことが出来るのですか？」

「ああ、彼の過負荷はとんでもない物だからね。」

「その過負荷というのは、さっきの模擬戦と関係あるのですか？」

「ああ、彼の過負荷は……………」

〈ジエイル説明中〉

「すべて  
なかつたこと現実を虚構にする力……」

「だから、さつきも私達の攻撃を受けても無傷じゃなくて、なかつたことにしたのか。」

娘達も驚いているようだね。

「まだ、彼には隠している力があるみたいだしね。」

そう、楔君はもう一つ過負荷を持っているらしい。

それがどんな物が、楽しみだよ。

ククククッ!!

ジエイルside out

楔side

ゾクッ!!

「『うお!?!?』」

《どうしたんですか?》



「『いや』『なんだか寒気が』」

《風邪ですか？》

「『多分』『違うと思う』」

なんだっただんだ？

楔 side out

第9箱 日常 パート2（後書き）

将「いかがでしたか？」

楔「『感想』『ご指摘』『お待ちしております』」

将&amp;mp;楔「『それでは、次回もなかよくして  
ね？』」

第10箱 ホテル・アグスタ（前書き）

将「はい、今回はアグスタ編です。」

楔「『遅かったね』」

将「その理由はあとがきで。」

将「それでは」

将& amp; 楔「『魔法少女リリカルなのはStrikerS 過  
負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まるよ』」

## 第10箱 ホテル・アゲスタ

楔 side

前回の模擬戦から1週間が経った。

あの日以来、ナンバーズとは会っていない。

僕が、わざと会わないようにしている。

もし会っても何か話してくる前に逃げているからねえ。

そんなこんなで自分の部屋でゴロゴロしていると、ドクターから呼び出しがきた。

「『何だろうね？』 『仕事かな？』」

《おそらく、仕事に関係することだと思いますよ。》

アリスと雑談しながらドクターの所まで向かった。

「『ドクター』 『仕事？』」

「ああ、そつだよ。」

「『内容は？』」

今回はなんだかやる気が出なくて、服装は白いTシャツに制服の黒いズボンだ。

「今回は、ホテル・アグスタで行われる骨董品のオークションにガジェットを向かわせるつもりだね。」

「『なるほど』『ガジェットの護衛？をすればいいの？』」

「そう。」

じゃ、比較的に楽そうな仕事だね。

「ちなみに、起動六課が警備しているからね。気をつけてね？」

ドクターのその言葉で、余計に気分が悪くなった。

別に彼女達が嫌いな訳じゃない。

ただ、僕には彼女達が眩しすぎる。

僕は明らかに狂っているからね。

「『はあ』『まあいいよ』」

そう言って、僕はドクターの部屋から出ようとした。

「あ、そうだ。今回はゼスト達にも手伝ってもらおうから。」

ゼストさん達か。あの人達も僕は苦手だ。

「『りょうか』『い』」

《マスター、シャキツとしてください》

そんなこと言われても……

「『という訳で』『来ました』『ホテル・アグスタ』」

《なにが、という訳なんですか……》

「『気にしない』『気にしない』」

キンクリっというんだよ？

《マスター、近くにゼストさん達の魔力反応がありました。》

「『じゃ』『挨拶にでも』『行きますか』」

楔 side out

ゼスト side

今回、ルーテシアと共にホテル・アグスタに来たが。

「あそこか。」

今、アグスタの近くにある森にいる。

「お前の探し物は、ここにはないのだろうか？」

「……………」

「なにか、気になるのか？」

「……………」

すると、ルーテシアの召喚虫が来た。

「…………ドクターの玩具が近づいてきてるって。」

とにかく、様子見だな。

ゼスト side out

起動六課 side

現在、起動六課はホテル・アグスタに近づいてきているガジェットを破壊のため、付近で待機中だ。

「副隊長達とザフィーラ、すごいー!!」

「これで、能力リミッター付き……………」

先ほど、起動六課の副隊長2人とザフィーラがガジェットを順調に破壊している。

「……っ！」

ティアナは、拳を握り締めていた。

起動六課 side out

ゼスト side

始まったか。

ホテル・アグスタの近くの森から煙がのぼっているのが見えた。

おそらく、警備している者が破壊しているのだろう。

ブンッ！

目の前に急にモニターが展開された。

「御機嫌よう。騎士ゼスト、ルーテシア。」

「……御機嫌よう。」

「何のようだ。」

「冷たいねえ。近くで状況を見ているのだろうか？あのホテルにレリ



ツクはなさそうだ。」

「実験材料として、興味深い骨董品が一つあるんだ。少し協力してくれないかね？」

「断る。レリックが絡まる限り、お互いに不可侵を守ると決めたはずだ。」

「……ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？」

「いいよ。」

「優しいなあ、ありがとう。今度、是非お茶とお菓子をどうぞさせてくれ。君のデバイスに私がほしい物のデータを送ったよ。」

「……うん。じゃあ、御機嫌よう、ドクター。」

「ああ、御機嫌よう。あ、そうだ。そちらに楔君が向かっているから、彼と協力すればいいよ。」

そう言っつて、通信は切れた。

それにしても……

「奴が来るのか。」

球磨川 楔、奴は全てが狂っている。

考え方も、行動も全てが狂っている。

出来れば、あいつとは会いたくないが。

「いいのか？」

そうルーテシアに言う。

「……うん。」

「ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はそんなにドクターのこと嫌いじゃないから。」

……本当に、優しいなルーテシアは。

「……楔も、そんなに悪い人じゃないから。」

ルーテシアはそう言うが、そうは思えない。

「『あ』『いたいた』『やつほ』」

そんなことを考えていると、茂みの向こうから例の男、球磨川 楔がやって来た。

「こんにちは、楔。」

「『うん』『こんにちは』『ルーテシアちゃん』『ゼストさん』」

「……あぁ。」

「……それじゃ、始める。」

そう言って、ルーテシアは少し俺たちから離れた場所に行き、  
魔方阵を展開させた。

「『ゼストさん』」

「・・・なんだ。」

「『僕はこれから』 『アグスタの中に行きます』」

「・・・なにが目的だ。」

「『ちよつと』 『ごみ掃除に』」

感情の入っていない笑顔で奴は俺に言った。

「・・・わかった。」

「『あとで』 『合流しましょう』」

そして、奴はアグスタに転移した。

ゼスト side out

楔 side

コツッコツッコツッコツ

僕は今、アグスタの中にいる。

ドクターには悪いけど、今回は僕の目的のために動く。

このオークションに集まっている客の中で、管理局員もいる。

その中に、僕が調べたゴミも来ている。

そう、大体は予想できていると思うが、今回はそのゴミの始末だ。

これは正義なんて大したものじゃない。簡単に言えばエゴだ。

僕は、僕のエゴのためにゴミを始末する。

オークションが行われている会場に着くと、会場は騒がしくなっていた。

それはそうだろう。なんせ、外にはガジェットが向かっているんだからな。

しかし、この騒ぎは逆に僕にとっては好都合だ。

「『(アリス、<sup>ターゲット</sup>目的は?)』」

《(います。距離56メートル、一番前の右から8番目の椅子の所です!)(》

そちらに目を向ける。

いたいた、いかにも慌てていて我先にと逃げようとしているデブでハゲの中年。

そいつに向かって歩く。

人ごみの中を使って、ばれないように進む。

そして、奴の目の前に来た。

「き、貴様っ！そこを早くどけ！！」

この騒ぎなら、こいつが叫んでも分からないだろ。

「『お前が』 『ガーベルト・ギルトだな』」

「そ、そうだっ！！それがどうした、早くそこをどけ」ガシッ！！」

「

ゴミが喋る前に頭をつかみ、会場の隅に行く。

そして、ゴミを壁に叩きつける。

「ぎゃあー！！」と、汚い声で叫ぶ。

「ま、まで！私が何をしたと言っただ！！」

「『貴様は』 『裏金』 『賄賂』 『違法研究をしていたそうじゃないか』」

「な、なぜそれをつ！？」

「『別にいいじゃないか』 『そんなこと』」

「た、頼む！助けてくれ！！何でもするから！！」

何でも？

「『本当に？』」

「あ、ああ本当だ！何でもする！！」

「『それじゃあ』」

『死んでよ』

さて、ゴミ掃除も済んだし、ルーテシア達に合流しようかな？  
外に転移すると、空中にでた。

「『あれ？』 『アリス』 『珍しくミスした？』」

《そんなはずは・・・ッ！！マスター！！》

「『へ？』」

前を見てみると、青髪のボーイッシュな女の子にオレンジ色の魔力弾が迫っていた。

僕はこの時、なぜ気がつかなかったんだろう。青髪の女の子がスバルだってことに。

とっさに僕は青髪の女の子の前に行って、魔力弾の魔力をなかったことにした。

すると、魔力弾は消えた。

そして、この瞬間に青髪が原作キャラのスバルと気づく。

・・・やっちゃった。orz

このままここにいと、副隊長達（シグナム達）が来る！！

めんどくさいのは嫌いなので、すぐに轉移した。

その時に、ティアナに念話を送った。

一応、起動六課は嫌いじゃないので、慰め？みたいな言葉を送った。

まあ、犯罪者の言葉なんて聞くとは思わないけどね。

そして、ルーテシア達と合流した。

目的の物はゲットしてみた。

さして、帰ったらコロコロするぞ〜

《マスター、帰ったら報告が先ですよ。》

そんなばかな・・・orz



第10箱 ホテル・アグスタ（後書き）

将「はい、今回はこんな感じですよ。」

楔「『それで？』 『遅れた理由は？』」

将「新しい小説書いてたらこうなっちゃった」

楔「『あ』『そう』」

将「……え？……あ、あれ？」

楔「『何？』」

将「怒らないの？もっとこう、『キモ』とか『ウザ』とか……」

楔「『べつ々に』」

将「逆に黙っているほうが恐ろしい……」（ ） （ ） （ ） （ ） （ ） （ ）  
（ガクガクブルブル）

将「そ、それでは」

将&楔「『次回も なかよくしてね？』」

第11箱 起動六課に侵入する過負荷の少年（前書き）

将「総合 PV・ユニークアクセス小説全体 PV 128 / 8  
74 ユニーク23 / 403人 だ〜よ〜！！キャハツ」

楔「『キモイ』」

将「…………orz」

楔「『それでは』」

楔「『魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年』が始まるよ』」

楔「『こんな作品にこんなに人が…………』」

楔「『こんな駄作者にありがとうございます、皆様』」

将「シヨボーン」(、) (、) (、)

## 第11箱 起動六課に侵入する過負荷の少年

楔 side

どうも。前回起動六課の人、スバルを助けてしまった楔です。

ただ今、起動六課に侵入してティアナの特訓をしています。

……え？

なんでそんな敵陣の本陣にいるのかって？

………なんでだろ？

いやいや、なんかね？ちょっとかわいそうかなって思いました、はい。

え？<sup>マイナス</sup>過負荷のくせになに言ってんだ？

そんな事言わないでよ、僕だって、転生する前は普通<sup>ノーマル</sup>だったんだから。

一人でそんな事をしてると、

《マスター……》

なんだかアリスに冷たい目？で見られた。

「『やだな』『そんな目で見ないでよ』『」

「誰!!」

あ、見つかった。

「『やつほー』『元気にしてたかな?』『局長さん』」

「球磨川 楔!!!!」

おお、何だか僕の事もバレてるみたいだ。

「『そうだよ』『皆のアイドル犯罪者』『楔ちゃんだよ』」

クルクル回りながら言ってみた。

「……………」

あれ?あんまり反応なしか……。

「何故、こんな所に。」

デバイスを構えて、警戒しているティアナが問いかけてくる。

「『そうだね』『君が心配だったからかな?』」

「え?」

ポカーンとした顔になるティアナ。

「ッ!!!!まじめに答えなさい!!」

本当なのにな。

「『君』 『アグスタでの事』 『引きずってるでしょ?』」

「ッ!」

わかりやすいね。

「『いいじゃない』 『別に失敗なんて』」

「私は……」

警戒しても隙だらけじゃ意味ないねえ

「私は……凡人だから。」

「『君』 『わかって言ってるの?』 『それ』」

「え?」

「『君は自分のこと凡人って言ってるけど』 『君だって十分に才能がある』 『頭もいい』」

「けど……」

はあ。

「『まあ』 『別にいいよ』 『所詮』 『犯罪者の戯言だよ』 『けど』 『こんな訓練は体を壊すだけだよ』 『君も』 『あの高町なのはのよ』」

うになるかもしれないのに」

「なのはさんのように？」

そういえば、まだ怪我の事ははなしてなかったか。

「『その内わかるよ』『それじゃ』『そろそろ見つかる前に』『退散させてもらうね』」

「ッ！ま、待ちなさい！！」

「『あんまり無理しちゃだめだよ』」

そして、僕は転送魔法を使って、起動六課から去った。

楔 side out

ティアナ side

「なんなんだろ、アイツ。」

敵に対して、心配するなんて。

それに、アイツが言ってたなのはさんのようにってどういう意味だ  
る？

っと、いけない、訓練に集中しなきゃ！

だって私は、凡人なんだから……。

その日は、空に明るみがかかるまで訓練を続けた。

その日の訓練がきつかったのは言うまでもない。

ティアナside out

楔side

はあ。

なんであんなことしたんだろ、僕。

《マスターって以外に馬鹿なんですか？》

何気にアリスがキツイ事を言ってくる。

「『<sup>プラス</sup>光にいる彼女達が』 『<sup>マイナス</sup>闇に落ちるのが』 『嫌なのかもね』」

《……マスター。》

……僕らしくないね。

「『さあ』 『部屋に戻って』 『もう一眠りだ』」

《クスッ、あまりだらけては管理局に捕まりますよマスター？》

「『そのときは』『そのときだよ』『」

捕まる気もないけどね。

「『たぶん』『あのオレンジは』『成長するね』『」

《何故ですか?》

原作知ってるからなんて言えない。

「『勘だよ』『」

僕も、そろそろ厳しいかな?

確かに、僕の過負荷<sup>マイナス</sup>で負けることはないけど、勝てるかはわからない。

……あの【過負荷】だけは使いたくないんだけどね。

うーん、やっぱり訓練でもしようかな?

使いたくないんだよね



「却本作り（ブックメーカー）」だけは・・・ね。

第11箱 起動六課に侵入する過負荷の少年（後書き）

将「今回は短いです。すいません。」

楔「『まっただね』」

将「今回で、楔に「脚本作り」があることが判明いたしました！」

楔「『でも』」S・Fさんの『』「おかげだけどね『』」

将「そうです！S・F様のアイデアのおかげです！！ありがとうございます！！」  
「ざいます！...」

将「それでは、」

将& amp; 楔「『次回も な か よ く し て ね ？』」

将「『ご感想、ご指摘お待ちしております』」ノシ

第12箱 酒場？にて（前書き）

将「今回は他のsideが多いと思います。」

楔「『僕の出番』あるの？」

将「一応あると思う。」

楔「『ないかもしれないの？』」

将「……………」（汗）

楔「『ねえ』『きいて』魔法少女リリカルなのはStrikers  
過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年、始まります！！』『ごまか  
された』」

将「ナンノコトヤラ？」

楔「『片言になってるよ』」

## 第12箱 酒場?にて

ティアナside

「あれ?・・・」

目を覚ますと、私は寝ていた。

「あらティアナ、起きた?」

シャル先生が入ってきた。

「シャル先生。えつと・・・。」

「ここは、医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる?」

そつだ私、なのはさんに撃墜されたんだ・・・。

「・・・はい。」

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージはないと思うんだけど。」

シャル先生はそう言って、机に向かった。

「どこか痛いところある?」

シャマル先生がズボンを持ってきてくれた。

よく見れば、私はズボンを履いていなかった・・・恥ずかしい・・・  
／／／／

「いいえ、大丈夫です・・・」

そう言っただけ私は時計を見た。

「え！？9時過ぎ！？え！夜！？」

「すごく熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思っくらい。」

私、そんなに熟睡してたんだ・・・。

「溜まっていた疲れが、まとめてきたのよ。」

(こんな訓練は体を壊すだけだよ)

不意に、アイツの言葉を思い出した。

私はその後、スバルと一緒にオフィスに謝りに行った。

ティアナ side out

楔 side

「『なんだ』 『ちゃんと僕の出番もあるんじゃないか作者』」

メタ発言やめて。

僕は今、ミッドのはずれにある酒屋？見たいな所にいる。

別に、お酒を飲むわけじゃない。

ある人物と待ち合わせをしているのだ。

その人物は……。

「すまない。待たせたな。」

「『大丈夫だよ』 『そんなに待ってないから』」

『クロノ』

「

そう、管理局員である、クロノ・ハラオウン提督だ。

「そつか、そつ言ってもらえると助かる。」

「『相変わらず』『エイミィに』『尻にしかれてるんだろ?』『提督殿?』『』」

「それを言わないでくれ。」

苦笑いをするクロノ。

「……で、そつちはどうなんだい?」

「『普通だよ』『普通』『あ』『』」

「どうした?」

「『えっと』『この前』『ちよいと六課に』『侵入しちゃった』『』」

「……はあ。」

あれ?呆れられた。

ここで、僕とクロノがどうしてこんなに仲が言つと、前にゴミ掃除の時に会つて、戦ったけどクロノの体力切れで僕の勝ち。

そんで、話してたら意気投合して、ちよくちよく話したりしている。

なんで、僕のことを逮捕しないのか聞いてみたら。

「楔を捕まえてもすぐに逃げられそうだから」と言つのだ。

確かに、僕なら逃げられるね、簡単に。

僕たちはその後、他愛もない話をしていた。

楔 s i d e o u t



第12箱 酒場？にて（後書き）

将「前書き関係なかった・・・」

楔「『普段と』『何も』『変わらなかったね』」

将「申し訳ありません!!」

将「次回はなのはの怪我の事を書きたいとおもいます。」

将&amp;楔「『次回もなかよくしてね?』」

第13箱 過去の失敗 前編（前書き）

将「更新が遅れてすみません!!」

将「学校など修学旅行などで随分遅れてしまいました!!」

将「今回はなのはの怪我についてです。」

将「それでは、魔法少女リリカルなのはStrikers 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年。始まります」

### 第13箱 過去の失敗 前編

六課 side

現在、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、フォワード陣はヘリポートにいる。

ついさつきガジェットの反応が海上に出た、その迎撃に向かうために現在ヘリポートに集まっている。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人。」

「皆はロビーで出動待機ね。」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「」「はい！」「」

「……はい。」

隊長たちの言葉を受け、返事をするフォワード陣。

しかし、ティアナだけは少し返事が遅れた。

そんなティアナを見たなのは、

「ああ、それからティアナ。」

「……」

なのはに呼ばれ、ティアナがなのはの方へ向く。

「ティアナは、出動待機から外れところか。」

「っ!!」

「「「えっ!?!」」」

なのはの一言に、フォワード陣は困惑した。

「……その方がいいな。そうしとけ。」

「今夜は体調も魔力も、ベストじゃないだろうし。」

なのはは、なだめるように言う。

しかし、

「言う事を聞かない奴は、使えないってことですか……。」

ティアナは俯いたままなのはに言う。

そんなティアナになのはは「はぁ」とため息をして、

「自分で言っていてわからない? 当たり前のことだよ、それ。」

すると、ティアナは顔を上げ、

「現場での指示や命令は聞いてます！教導だって、ちゃんとさばらずやっています。」

そんなティアナに苛立ったのか、ヴィータが近づこうとするが、なのはにとめられる。

「私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルとエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルもない！」

ティアナは目尻に涙を溜めていた。

「少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くななんてなれないじゃないですかっ！！」

すると、シグナムがティアナの胸倉を掴み、自分の方へ向かせて。

バキッ！！

ティアナを殴った。

「シグナム（さん）！！」

「心配するな。加減はした。」

倒れたティアナに、スバルが駆け寄る。

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじつきやっつてやるからつけあがる。」

シグナムはなのは達の方を向きながら言った。

「ヴァイス!! もう出られるな?」

「乗り込んでいただけりゃ、すぐにでも!!」

そして、ヘリが飛ぶ寸前

「ティアナ! 思いつめちゃってるみたいだけど、戻ってきたらゆっくり話そう!!」

「だから!! 付き合うなつてのに!!」

そして、ヘリは飛び立った。

「目障りだ。いつまでも甘ったれていないで、さっさと部屋に戻れ。」

シグナムは冷たく言い放つ。

エリオとキャロはなんとかなだめようとしている。

すると、スバルが立ち上がり、

「シグナム副隊長!!」

「・・・なんだ。」

「・・・命令違反は絶対駄目だし、さっきのティアのもの言いとか、それを止められなかった私は確かに駄目だったと思います・・・。」

「……っ！」

スバルの言葉に、ティアナが顔を上げる。

「だけど、自分なりに強くなるうとするのとか！キツイ状況でも、なんとかしようと頑張るのってそんなにいけない事なんじゃないか！？」

「……」

シグナムは黙って聞いている。

「自分なりの努力とか、そうゆう事もやっちゃいけないんじゃないでしょうか！？」

スバルは肩をふるわせながら言う。

そこに、

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力はすごくいい事だよ。」

皆が声の方へ向くと、オペレーターのシャーリーがいた。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはライン曹長がいてくれますから。」

シャーリーは悲しそうな顔をしながらフォワード達を見る。

「なんだかもう、皆不器用で、見てられなくて・・・皆ちよつと口  
ビーに集まって。私が説明するから、なのはさんの事となのはさん  
の教導の意味。」



第13箱 過去の失敗 前編（後書き）

将「はい、前編終了です。」

楔「『今回』『僕の出番ないんだけど?』」

将「気にしない気にしない。」

楔&amp;将「『次回もなかよくしてね?』」

番外箱 なくなった過去（前書き）

将「お久しぶりです。また最近忙しく、小説が手につかない今日この頃、今回はちょっとした番外編です。少し、物語に関係してきます。」

## 番外箱 なくなった過去

それは、遠い遠い記憶。

まだ少年が、<sup>マイナス</sup>少しだけ、<sup>プラス</sup>そう少しだけ心があつた時の記憶。

それは少年が公園を通つた時だ。

少年は、公園で泣いている少女を見つけた。

少年は、少女に訪ねた。

どうして、泣いているんだい？

その問いに、少女は答えた。

パパが入院しちゃったの

少女の話によると、自分の父親が仕事で大怪我をして、入院してい

るらしい。

母も姉も、店の仕事で大変らしい。

兄も、なんだか近寄りがたい雰囲気を出していて、怖いらしい。

すると、少女は

はいい子にしてなきゃ、だめなの

少女は顔を俯かせた。

そして、少年はそんな少女をみて思った。

この子は、強い。けど、それと同等に

脆く、弱い

少年は無意識の内に、少女の頭を撫でていた。

ふえ？

少女は、俯いていた顔をあげて、少年を見た。

少女の目には、泣いた痕があった。

少年は少女に微笑みながら言った。

無理をしちゃ、だめだよ？

その言葉に、少女は一瞬、キョトンとした顔になるが、すぐに目尻に涙をためて、少年の胸に飛び込んだ。

少女が泣いている中、少年はずっと少女の頭を撫でていた。

しばらくして、少女は泣きつかれたのだろうか、すっかりベンチで寝てしまっている。

少年は少女の顔をしばらく見ていた。

ううん

すると、さっきまで寝ていた少女が起きた。

まだ、眠たいでしょ？

少年は微笑みながら言う。

・・・うん

少女は寝ぼけながら、少年に返事をした。

そう、だったらもうちょっと寝ていてもいいんだよ？

ん

少女はまた、眠りにつこうとする。

もう少女の瞼が閉じようとしたとき、

また、会える？

少女の問いに、少年は一瞬驚愕した顔になったが、すぐに微笑みながら

うん、またいつか会えるよ

その言葉を最後に、少女の意識は薄れていった。

今、少年はベンチに寝ている少女の顔を見ていた。

少年は少女の頭にそっと手をおいた。

ごめんね。でも、きっと君は<sup>プラス</sup>幸せになれる。こんな<sup>マイナス</sup>不幸の事なんか、忘れた方が、きっといい。・・・もしかしたら、会えるかもしれないね。

敵として

さよなら

そのとき、少女の閉じられた瞼から涙がながれた。



これは、遠い遠い記憶

それは、偶然か、それとも・・・。

しかし、少年が出会ったのは、彼女だけではない。

それは、また今度・・・。

番外箱 なくなった過去（後書き）

将「まあ、今回は番外編1でしたが、いかがでしたか？」

将「まだあと二、三話ぐらい番外編が続きます。」

将「それでは、次回もなかよくしてね？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1102v/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 過負荷の仮面をかぶる過負荷の少年

2011年10月10日20時02分発行